

浪江

ひだり駒



大堀相馬焼

大堀相馬焼伝統つなぐ

震災乗り越え、未来へ

私たちは、大堀相馬焼協同組合の小野田利治さん(59)の指導を受けながら、陶器作りを体験した。大堀相馬焼の展示即売場と工房は、浪江町の「なみえの技・なりわい館」内にある。私たちは小野田さんから大堀相馬焼の歴史や独特の技法、震災後の現状について話を聞いた。

相馬地方の伝統的な焼き物「大堀相馬焼」は江戸時代から三〇〇年以上の歴史をもつ。東日本大震災によって浪江町の人々は避難を余儀なくされた。浪江町大堀地区に震災前は二十軒以上あった窯元は、廃業・移転を余儀なくされた。「大堀相馬焼協同組合」の理事長小野田さんは、大堀で十三代続く窯元「春山窯」を営んでいる。現在は福島県中通りの本宮市に窯を構える。震災によって影響を受けたのは住居だけではなく、原料にも影響があった。焼き物の特徴は青磁釉という独特の色である。その原料である砥山石も粘土も放射能汚染によって地元で採掘できなくなっていた。組合では、愛知県瀬戸市や会津地方のものが適していることが分かったそうだ。



▲小野田さんの手ほどきを受けながら、陶器づくりを体験した。

大堀相馬焼に描かれる馬は走り馬と呼ばれ、その多くは左向きである。理由としては、右利きの職人が馬の頭から描くと、左向きの方が描きやすいとされる。しかし左向きの馬は「右に出る者がいない」という言葉遊びのような意味も含まれている。熟練の技で描かれた走り馬は昔から縁起がいいものとされてきた。



▲貫入や二重焼きが大堀焼の特徴

「なりわい取り戻したい」

組合理事長小野田さんに聞く

震災前と同じように浪江町内で活動したいか、という質問に対し、小野田さんは「浪江町は除染が進んでいるが、古い家屋は解体工事が進んでいる。避難先で新しい生活を始めて十年も経っている。戻っても元の生活を取り戻すことは難しい。ただ、自分としては町内に居場所をつくりたいなあ、と思っている」と話してくれた。

今後の目標については、「技術・伝統をつないでいくとともに、震災前のなりわいを取り戻したい。そのために組合員である仲間たちとつながりを大切にしていきたい。窯は少なくなったが、皆頑張っていますよ」



▲大堀相馬焼の歴史と現状を語る小野田さん

江戸時代からの伝統の技

他にはない工夫

大堀相馬焼の歴史は江戸時代にまでさかのぼる。陶器は当時の相馬藩の特産品であり、江戸末期の窯元数は藩内八村で百戸を超えた。しかし明治時代に入り、自由貿易が促進されると、廃業する窯元が続出。藩からの援助も途絶え「他にはないモノ」でないと売れない時代となった。そこで考え出されたのが独特の工夫である。



意味があり、下部の黒い部分を白く塗り、波を、ハート型の穴を描いている。

馬くいく

五年ぶりにジャーナリストスクールにOBとして参加した。参加者は小学校五年生から高校二年生までさまざま。学年の違う仲間と協力して取材し、記事を書き、新聞を完成させる。子どもたちにとっては十分に肉体と頭を使う作業であったと思う。▲多くの人は、頭だけで考えているとは分らない大変さがあったようだ。ものごとを考えるのに、具体的な日々の体験がいかに肝要であるか分かったと思う。

▲日常生活の中での具体的な体験を軽視することはできない。歴史は多くの人々の個別的な日常体験の集積だとも言えるからだ。彼らが十年前の被災地での取材体験を通して学んだことは、一人ひとりが自らの歴史観を形づくる契機になったに違いない。(横村)

形づくり難しかった

「なりわい館」で陶器づくり体験

私は、大堀相馬焼づくりを体験した。はじめに粘土で底の部分を作り、

細長くしたひも状の粘土を重ねて形を作っていく。私はコップを作った。小さな器も作った。



▲何度か小野田さんに修正してもらおう。

どちらも一番苦労したのは、重ねた粘土と粘土の境をふさぐことだった。失敗しそうな時にすぐに直してくれる小野田さんの技は、とてもすごいと思った。四十年もやっているベテランの技だと思った。小野田さんは、「大堀相馬焼の技術、伝統をつないでいかなければならない、浪江をもつ

浪江町の道の駅にある「なみえの技・なりわい館」で小野田利治さんに話を聞いた。小野田さんは「大堀相馬焼協同組合」の理事長である。ふるさとである浪江町大堀を離れて十年。現在は中通りの本宮市に工房を構え、浪江に「通勤する」形になった。

「一週間ぐらいで、すぐに帰れると思ってた。まさか今日まで十年半も帰れないとは思っていなかった」という。震災前は三三軒あった窯元達もそれぞれ離れた土地に避難し、仲間とは離ればなれになった。震災後に

廃業した人、亡くなった人もいる。この十年、窯元の仲間もそれぞれの事情を

意見をもう一度焼き物を

抱えている。「同じ場所です仕事をしたが窯元達にも都合があるから難しい」と言う。(大高)

浪江町大堀地区は現在も立ち入り制限が続く。地区には物産会館「陶芸の杜おぼり」の建物が残る。震災前は多くの窯元の作品が展示・即売されてにぎわった。小野田さんは「陶芸の杜」の復活を夢見ている。「建物はしっかりしてるんです。周囲の除染も進んでいるので、もう一度皆が集まれる施設にしたい。もちろん浪江町がもう一度楽しい町になって欲しい」と話す。

国指定の伝統的工芸品「大堀相馬焼」の今後の伝承と、大堀地区の復興を私達にも応援したい。(大高)



▲出来上がった私たちの作品(左)粘土の厚みの調整が難しい。

と楽しくしていきたい」とおっしゃっていた。

青磁色は、大堀相馬焼の伝統色である。小野田さんは「釉薬を混ぜていろいろな色を出す中で

も、改めて青磁の色を大切にしたい」と言っていた。青磁色の他にピンク色や緑がかかった青色等がある。私は緑がかかった青色を選んだ。(高倉)

伝統の技を絶やささない

県内の3窯元にも取材

事前取材として福島県南地方の西郷村、白河市、矢吹町にある大堀相馬焼の三つの窯元を訪ねた。

いずれの窯元も故郷浪江を離れた地で「大堀相馬焼」の伝統と技を継承している。現在「大堀相馬焼協同組合」に加入して

離れていても強い仲間の絆

西白河郡西郷村に窯を

私たちが作りました。

新聞の見方変わった

僕は、ジャーナリストのスキルを通して原稿の書き方や新聞のある必要性について知ることが出来た。さらに今の浪江町の現状について考えや理解を深める事が出来ました。今回学んだ貴重な経験を忘れずに今後の生活等で活かしていきたいと思えます。(大高 空 矢吹中二年)

この新聞の作成にあたり、相馬焼の文化や魅力に触れる機会を頂いた。編集の際、取材先の小野田さんの「相馬焼の技術、伝統を伝えていきたい」という言葉が思い出された。この新聞が伝統の継承の足掛かりとなれば幸いです。(三島木 桜子 安積黎明高校二年)

私は、新聞作りを通して、一つの新聞を作るのに様々な人が関わり、大変な作業をしているのだと実感した。紙面に、文章を分かりやすく詰めていく作業の大変さが分かった。今回学んだことを生かし、新聞への見方を

変えられるといいと思う。(高倉 優月 平四小五年)

普段はなかなかできない貴重な体験ができ、とても有意義な時間を過ごせた。震災の爪痕は十年たっても残っていて、今も頑張っている人がいる。そのことと、震災の恐ろしさを少しでも後世の人に伝えていきたいと思う。(折笠 瑠華 相馬高校一年)



▲左から大高、折笠、三島木、高倉の各記者

構える「松永窯」の松永和夫さんに話を聞いた。松永さんは、窯元の三代目として高校卒業後に就業した。今は五名で仕事をしている。家族のほかに地域おこし協力隊の人も働いている。「松永窯」のこだわりは、楽しみながら仕事をすること。松永さんは現在、栃木県那須町で避難生活を続けている。工房のある西郷村と故郷浪江町は遠く離れている。故郷への思いを込めながら大堀相馬焼を作り続けている。「続いて白河市大信の「いかりや商店」の山田

慎一さんに話を聞いた。山田さんは愛知県立瀬戸窯業高等学校専攻科を卒業後、父と職人のもとで修行し現在にいたっている。大堀相馬焼の技法を用いて作品を制作するほか、今では途絶えてしまった白河地方の焼き物「白河焼」の復活にも取り組んでいる。震災後に仲間の窯元達とは離れてしまったが、互いに連絡を取り、なるべく会う機会を作るようにしているそう。

最後は西白河郡矢吹町にある窯元「栖鳳窯」の山田正博さん。祖父の時

代から続く家業を継いで、山田さんで三代目。息子さんが四代目をめざして修行中だ。山田さんは矢吹町の工房で制作を行っている、同所で販売まで行っている。山田さんは常に「自分の窯元が一番だ」という思いで制作にあたり、浪江町を離れて避難場所を七か所も転々としたそうだ。現在は矢吹町内に住まいを構えている。「『伝統的工芸品大堀相馬焼』の名前も技法も、福島県内での再開だからこそできることだ」と話している。(大高)